

図書館だより



No. 9

平成31年1月11日

2019年が始まりました。今年も図書館をよろしくお願いいたします。今年
は年号が変わり、時代の節目の年となるわけですが、どんな本がみなさん
を楽しませてくれるでしょうか。紙面や館内でたくさんの本を紹介したり、読書会
やおはなし会など本を楽しむ企画も行ったり、「本って、おもしろい！」とみなさん
が思える瞬間を作っていきたいと思います。3年生は卒業までのカウントダ
ウンが始まってきました。ここからは、さらに時間が経つのが早くなります。や
り残しのないように1日1日を大切に過ごし、さらに思い出を増やしていきましょう。



さて、昨日は百人一首大会でしたね。団体戦も個人戦も熱気を帯びた試合が繰り広げられていました。
これを機に百人一首の楽しさに目覚めた人は、図書館に札を常備していますので、放課後に友だちと対決
してみたいでしょうか。

おりがみで干支を折る

754-ヤ『クリエイティブ折り紙』 山口 真 || 著 ソシム

小さい頃はよく折って楽しんでいた折り紙も大人になると、めっきり折ることがなくなってきました。
でも、ひさしぶりに折ると、懐かしい気持ちになれるし、作り方を見ながら折ってみると、意外と難しく
て「折り紙を甘く見ていた！」と悪戦苦闘したりもして楽しいものです。この折り紙の本のメインは、妖
怪や干支といった普段なかなか折る機会のないような生き物たちです。完成度の高い見た目です
が、わかりやすい折り方の説明がついていますので、みんなで盛り上がりながら折ってみてくだ
さい。図書館でもこれを参考に十二支を揃えて置物として図書館にも飾りたいなと思っています。

百人一首に新しい風が吹く

B911.5-七『千年後の百人一首』 清川 あさみ・最果 タヒ || 著 リトルモア

今、活躍が目されている2人の女性が百人一首の世界に挑んだ作品。31字の中に広がる情景
豊かな世界を、清川あさみさんが糸と布とビーズで情景を描き、最果タヒさんが歌に込められた思い
を現代語で新訳しています。ふたりが紡いだ百人一首からは新しい風が感じられますし、これをき
かけに原作への興味が芽生える人もいることでしょう。末尾には各歌の解説も載っており、合わせて
読むことでより深く百人一首に触れることもできます。札をとるためにただ覚えるのではなく、じっくり
すべての和歌を味わい、心を通わせてみてください。

今年の目標、何にする??

新年を迎え、気持ちも新たになったこの機会を逃さず、今年の目標を決め、いいスタートを切りましょう。

2020年のオリンピックに向けて英語力を鍛える…こんな目標には、この本!

830-ウ『純ジャパニーズの迷わない英語勉強法』 上乃 久子 || 著 小学館

英語を上達させたい人はきっと多いはず。その気持ちが結果に結びつくよう勉強を始める前に、どう
勉強すれば上達につながるのかを考えてみましょう。この本では、スピーキング、リスニング、ライテ
ィングの効果的な勉強法が紹介されています。「英語で身の回りの出来事を実況してみる」、「目につ
いた英語は何でも読んでみる」などテキストなしにすぐ始められることから、早速実践してみませんか。

手帳を楽しく使いこなす…こんな目標には、この本!

726-イ『4色ボールペンでかわいい手帳イラスト』 東京書店

最近ではスマートフォンのアプリを使って簡単にスケジュール管理をすることもできますが、紙の手帳
を使う楽しさを知っていませんか。絵は苦手だから…、センスがないから…とと思っている人にも気軽
に描けて、映えるイラストのコツや目を惹くレイアウトの例が載っています。可愛らしくデコレーショ
ンすれば、愛着が湧き、手帳を開く機会も増え、スケジュール管理がしっかりできるようになるはず。

無理なく体を鍛える…こんな目標には、この本!

780-ハ『女子の体幹レッスン』 広瀬 統一 || 著 Gakken

体幹とは、体の軸であり、体を支える大切な土台として活躍する筋肉です。体幹を整えば姿勢が
変わるし、正しい姿勢は体形にも変化をもたらします。姿勢グセ別にトレーニングをはじめ、気になる部
分の体幹エクササイズや不調に効く体幹の動かし方など、運動が苦手な人でも試してみる気が起
こる動きのレッスンが紹介されているので、なかなか運動は続かないという人にもおすすめです。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

先日、村田沙耶香さんの『地球星人』を読みました。芥川賞を受賞した『コンビニ人間』以上に衝撃的な内
容で「村田さんって、一体どんな人なんだろう」と知ってみたいくなりました。そこで読んだのが村田さんのエ
ッセイ『となりの脳世界』(914.6-ム 朝日新聞出版)です。作家さんの人柄に触れられるエッセイは、親
近感を抱ききっかけにもなり、小説とは違うおもしろさがあります。正座でくっつけるのは“つま先”でなくて
“かかと”だと勘違いしていたり、実際には存在しないクラスメイトの記憶があったり、コンビニへの愛を手
紙にしたためたりと、村田さんの日常や思い描くことはやっぱり私には「不思議な世界観だなあ」と感じるも
のでしたが、ふとした部分に自分や自分の親友と似たところを見つけて通じ合えたような気持ちにもなりま
した。人を知ってのおもしろいものですね。このエッセイで掘り始めた村田さんの人柄を浮かべながら、小
説も読み返してみようと思います。 【今井】



そうだ、先生と本のことを熱く語ろう!! ~菅先生編~

菅: 今、ちょうど江國香織さんの『きらきらひかる』を読み終わりました。

司: おおー！いいですね。私も『きらきらひかる』は大好きです。登場人物たちの個性が光っていて、ストーリーもおもしろい。

菅: 前に一度読んだことがあるんですけど、読み返してみると、覚えていないもので(笑)、最後まで新鮮な気持ちで読みました。家族も結構本を読むんですが、私は自分の本は自分で選んでいたの、母と本の話をするってなかったんです。でも、ちょうど自分の本を全部読み終わって、何もなくなった時に、母の本棚を「何かないかな〜」って物色して(笑)、その時に江國香織さんの本と出会いました。

司: お母様の本棚で見つけて読んだ本を好きになったって、素敵な出会いのきっかけですね。

菅: 『つめたいよるに』って短編集に入っている『デューク』も本当におすすめです。愛犬をなくした主人公の前に男の子が現れて…ってストーリーなんですけど、すごくよかったです。

司: それはまだ読んだことがないから、今度読んでみます。私も菅先生から教えてもらった山内マリコさんの『ここは退屈迎えに来て』を読み終えました。主人公とは別に裏の主役が他にいるって設定がおもしろいですね。しかも、物語が進むほど、どんどん過去に戻っていくという。

菅: その設定がちょっと新しいし、おもしろいですよね。この本もそうですけど、偶然にも選ぶ本が結構“田舎”が舞台になっていることが多くて、私自身が岩手県出身なので、読んでいて「ああ、こういう感じわかる〜」ってなります。

司: 私も新潟出身なので、ここで書かれている閉塞感とか周りに何も無い感じとか、光景が浮かんできます。そして、菅先生の言っていたとおり、山内さんは気になる書名をつけるのが上手いですね。『選んだ孤独はよい孤独』とか『アズミ・ハルコは行方不明』とか。

菅: コピーライターみたいな感じですよ。書名に惹かれて買うかもあって思いました。

司: 他には原田マハさん、坂木司さん、柚木麻子さんの本を色々読まれているようですが、1番好きな作家さんはこの3人とは別にいるんですか。

菅: 意外と1番好きな作家というのはいないんです。小さい頃から本を買ってもらっていたので読んでいたんですが、自分からもっと読みたいと思ったのは、中学生の時に読んだあさのあつこさんの『バッテリー』がすごくおもしろかったのがきっかけでした。あれで『読書っていいな』って習慣づきました。だから、その頃は「あさのあつこが好きです！」と言っていたんですけど、その後、他の作家の本にも手を出すようになって誰が一番好きとかはなくなりました。1冊読んでおもしろいなと思ったら、その人の本を読み進めるんですけど、ある程度のところまでいくと、また違う人の本を読むっていう風に移動していきますね。

司: じゃあ女性作家が好きとか、男性作家が好きとかってのもないですか。

菅: そうですね〜、でも意外と女性作家の本に惹かれちゃうかもしれないです。石田衣良さんの本を沢山読んでいた時期とかもありますけど、女性作家を読む方が多いですね。あと、作品によって雰囲気を変えてくる作家さんも好きです。

B913.6-I 『きらきらひかる』
江國 香織 || 著 新潮社

B913.6-I 『つめたいよるに』
江國 香織 || 著 新潮社

B913.6-ヤ 『ここは退屈迎えに来て』
山内 マリコ || 著 幻冬舎

913.6-A 『バッテリー』
あさの あつこ || 著 角川書店

司: あとは先生たちの話を聞いていて、大学で教授におすすめされた本をきっかけにその作家さんを好きになったりとかって結構あるように感じたんですけど、菅先生はどうですか。

菅: うーん、書に関する本は「あれがいいよ、これがいいよ」と教えてもらうことはありましたけど、それ以外の本を勧められたっていうのはなかったですね。

司: そうやって専門書をたくさん読まなくてはいけない中で、小説を読む時間というのは少なくなりましたか。

菅: いえ、逆に小説を読んでいた気がします。書道ばかりやっていて、図書館も書道の本を借りるか勉強をしにいっかでしたけど、自分で買う本は小説でしたね。私、気に入った本は残しておきたいタイプで、自分の本として棚に入れたいんですよ。

司: わかる！私も気に入った本は買って棚に揃えていきたい派です。好きな本で棚が埋まると嬉しいですよ。

菅: いいですよ〜。書道の作品に使うのもあって詩や短歌も結構読みます。中でも宮沢賢治とか石川啄木とか同じ岩手出身の人の作品を使いたくなるので著書も読んだり、作家研究もしますね。柊野浩一さんが石川啄木を現代語訳した『石川くん』も衝撃なことが書いてあったりしておもしろいです。

司: 柊野さんって『ショート・ソング』を書いている人ですよ。

菅: そうです、この人自身も歌人で、このコーナーでも紹介されていた加藤千恵さんとも交流があるみたいですね。あと、柚木麻子さんや坂木司さんを読んでいたのも、ちょうどこの頃です。

司: 柚木さんも坂木さんも読みやすくて、おもしろいですよね。『ランチのアッコちゃん』とか『和菓子のアン』とか。

菅: 昔は“共感する本”が好きだったんです。恋愛観とか、女子高生特有の気持ちとか、「これ、すごいわかる」って思いながら読んでいたんですけど、大人になってからは“共感しない本”も読みたくなりました。「こういう恋愛観は私とはちょっと違うけど、こういう人いたらいいな」とか、そういう風に読めるようになったのは少し大人になったのかな。好きなもの以外は受けつけない、っていうことはなくなりましたね。

司: 読書の幅が広がったんですね。そうやって、「こういう考え方もあるのだな」というのを知ることができるのが私も最近本を読んでいて楽しいことです。

菅: 自己啓発本みたいな本からでなくて、小説の中の登場人物が持つ考え方や生き方のほうがスツと心に入ってきますね。あと、本を好きになるきっかけになった本がもう1冊あって、『檸檬のころ』って青春小説なんですけど、これも大好きで当時何度も読んでいました。受験で上京する時にも持ってくるくらい好きでしたね。

司: わー、その本も気に入ります。読んでみたい！

菅: 今は窪美澄さんの『ふがいない僕は空を見た』を読んでいたんですけど、ちょっとお休み中です。結構そうやって途中で休憩を挟んで、しばらくしてからまた再開しますね。

司: 再開する、ってことは、途中でやめたりはしないんですか。

菅: そうです。休みを合間にいれつつ、読み切ります。

司: 他にも今年が終わる前に読み切ろうと思っている本はありますか。

菅: 森見登美彦さんの『夜は短し歩けよ乙女』ですね。おもしろいなと思うんですけど、なぜかまだ最後までたどり着けていなくて、二度寝かせているんです(笑)それを今年のうちに読みたいです。

B913.6-マ 『石川くん』
柊野 浩一 || 著 集英社

B913.6-ト 『檸檬のころ』
豊島 ミホ || 著 幻冬舎

913.6-I 『夜は短し歩けよ乙女』
森見 登美彦 || 著 角川書店